

隣村の子

小川未明

青空文庫

良吉は、重い荷物を自転車のうしろにつけて走つてきました。

その日は、あつい、あつい日でした。そこは大きなビルディングが、立ち並んでいて、自動車や、トラックや、また自転車が往来して、休むようなところもなかったのです。

そのうち、濠端へ出ると、車の数も少なくなり、柳の葉が風になびいていました。そしてガードの下に、さしかかると、冷たい風が吹いてきて、躰がひやりとしました。

「ここで、すこし休んでゆこう。」と、良吉は、自転車を止めて、さながら、坑のあちらの、ちがった、世界からでも吹い

てくるような、風を胸に入れていました。

暑い日に、働いている人々が、たまたま、こんな涼しいところを見いだしたときの喜びというものは、どんなでしょう。それは、一通りではありません。

「ごごは、いいところだな。」と、良吉は、思いました。良吉のほかに、日ごとにここで休んで、いった人があつた

みえて、タバコの空き箱や、破れた麦わら帽子などが、捨ててありました。なんの気なしに、ガードの壁を見ると、白いチヨークで、落書きがしてあつたので、それを見るうちに、子供らしい字で書かれた、……県……村……という文字が目に入りました。

「おお、これは私の生まれた、隣村の名だ。」と、良吉

は、その文字もじに吸すいつけられたように近ちかづきました。そして、もつとなにか書かいてなかうかと、さがしたけれど、それしか文字もじが書かいてありませんでした。

「だれが、書かいたのだらうな。」と、彼かれは、さびしさのうちにも、なつかしきを感じかんじたのであります。

彼かれは、また、思おもいました。

「きつと、自分じぶんのような、村むらから出でた子供こどもだらう。そして、ここを通とおるときに、ふと故郷こきようのことを思おもい出だしたのだらう。」

なぜなら、良りよう吉きちの村むらも、この隣となりの村むらも、青あおい青あおい、海うみに面めんした村むらであつて、夏なつになると、涼すずしい風かぜが、このガードを通とおつてくる風かぜのように、冷つめたく、かなたの、沖おきから吹ふいてきたのだから。

良吉は、しばらく、ぼんやりとして、これを書いた子供の姿を想像していましたが、急に下を向いて、あたりをさがしました。すると半分土にうずもれて、チヨークのかけらが、壁のきわに落ちていました。

彼は、それを拾うと、指さきで土を落としました。そして、壁に書いてある、落書きに並べて良吉は、自分の村の名を書き、そのかたわらにM生としたのであります。良吉の姓は、村らやま山であつたからです。

自分たちの村が並んでいるように、このガードの壁に、村の名が並べて書かれたのでも、良吉にとっては、このうえなく、なつかしいのでした。彼は、それを見て、にっこりと笑いました。

それから、また自転車じてんしゃに乗のつて、道みちを急いそいだのでありました。
 彼かれは、小学しょうがっこう校がっこうを卒そつぎよう業ぎようすると、すぐ都会とかいの呉服屋ごふくやへ奉ほうこ
 公こうに出だされました。それから、もう何なんねん年ねんたったでしよう。彼かれ
 は、勉べんきよう強きようして、末すえにはいい商しょうにん人にんになろうと思おもっているの
 でした。

彼かれは、都会とかいへ出でるとき、まだ小ちいさかつたから、汽車きしゃの中なかでは、
 故郷こきようが恋こいしくて泣なきつづけました。そのことを忘わすれません。ま
 た、奉公ほうこうをしてからも、夢ゆめの中なかで、お母かあさんと話はなしをして、目めが
 さめてから、しくしくと泣ないたこともありました。

そんなことを思おもうと、隣となりむら村むらから、この都会とかいにきている、顔かお
 を知しらない少しょうねん年ねんもやはり自じぶん分ぶんと同おなじように、はじめは、泣ない

たであろう、また、さびしかつたであろう。そして、自分じぶんが、片かたときたときも故郷こきょうのことを忘れぬように、その少年しょうねんも、自分じぶんの村むらを忘れわすないであろうと思おもうと、その顔かおを見みない少年しょうねんが、なんとなく、慕したわしくなりました。

良吉りようきちは「遠とおくからきて、働はたらいているのは、けっして、自分じぶん

ばかりでない。」と、考かんがえると、また、勇気ゆうきづけられもしました。

それから、半月はんつきばかりたつてから、良吉りようきちは、ふたたび用よう

たしのために、ガードの下したを通とおりかかりました。そのとき、彼かれは、

なんで落書らくがきのことを思おもい出ださずにいましょう。

「あの落書らくがきは、まだ書かいてあるかな。あれから、もし隣村となりむらの子こが見みたら、なにかまた書かいたかもしれない。」

彼は、一種のはかない希望と、なつかしみとをもつて、自転車（じてんしん）を止めてみました。自分の村の名も、隣村の名も、並ん

であのときのままになつていたけれど、しかし、それ以外（いがい）になにも新（あたら）しく書かれてはいませんでした。

「隣村の子は、その後ここを通らなかつたのだらう？」と、

良吉は、思いました。そしてどうか、その子が無事であるよ

うにと、良吉は、心のうちで祈つたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「隣村《となりむら》の子《こ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

隣村の子

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>